

第5回 いけじま ふくまん じ いせき

池島・福万寺遺跡

現地説明会



1992. 8. 1.

(財)大阪文化財
センター

池島・福万寺遺跡はタイムマシン

池島・福万寺遺跡は八尾市と東大阪市にまたがる大きな遺跡で、治水緑地の建設にともなって発掘調査がつけられています。これらの発掘調査によっていろいろな時代のようなすがだんだんとあきらかになり、この遺跡の大切さがわかってきました。

弥生時代 (2200年前～1700年前ころ)

弥生時代は日本でも米作りがはじまった時代です。

ここ池島・福万寺遺跡においても、弥生時代をとおして水田が遺跡全体にひろがっています。残念ながらムラのあった場所のはっきりしませんが、さほど遠くないところにムラがあったのでしょう。

古墳時代 (1700年前～1400年前ころ)

古墳時代は各地で小さまぎまな古墳がつくられた時代です。ここ池島・福万寺遺跡の東にも心合寺山古墳という大きな古墳がつくられています。

この遺跡ではこの時代にはムラがつくられたようで、建物跡のほか、玉などもたくさん出土しています。

このほか、このムラからは煮炊きにつかったカマドがたくさん出土することが非常に特徴的な点だといえます。



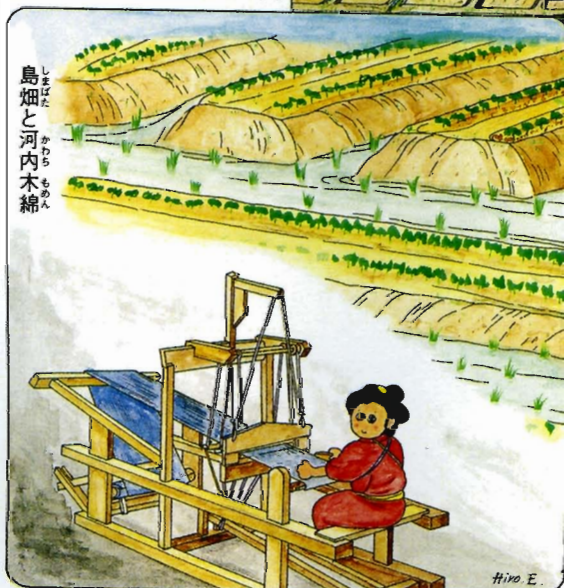
奈良・平安時代

(1300年前～800年前ころ)

奈良・平安時代は奈良に平城京、京都に平安京という都がおかれたはなやかな時代です。

それにくらべて、池島・福万寺遺跡の周辺にはのどかな田畑がひろがっていたようです。

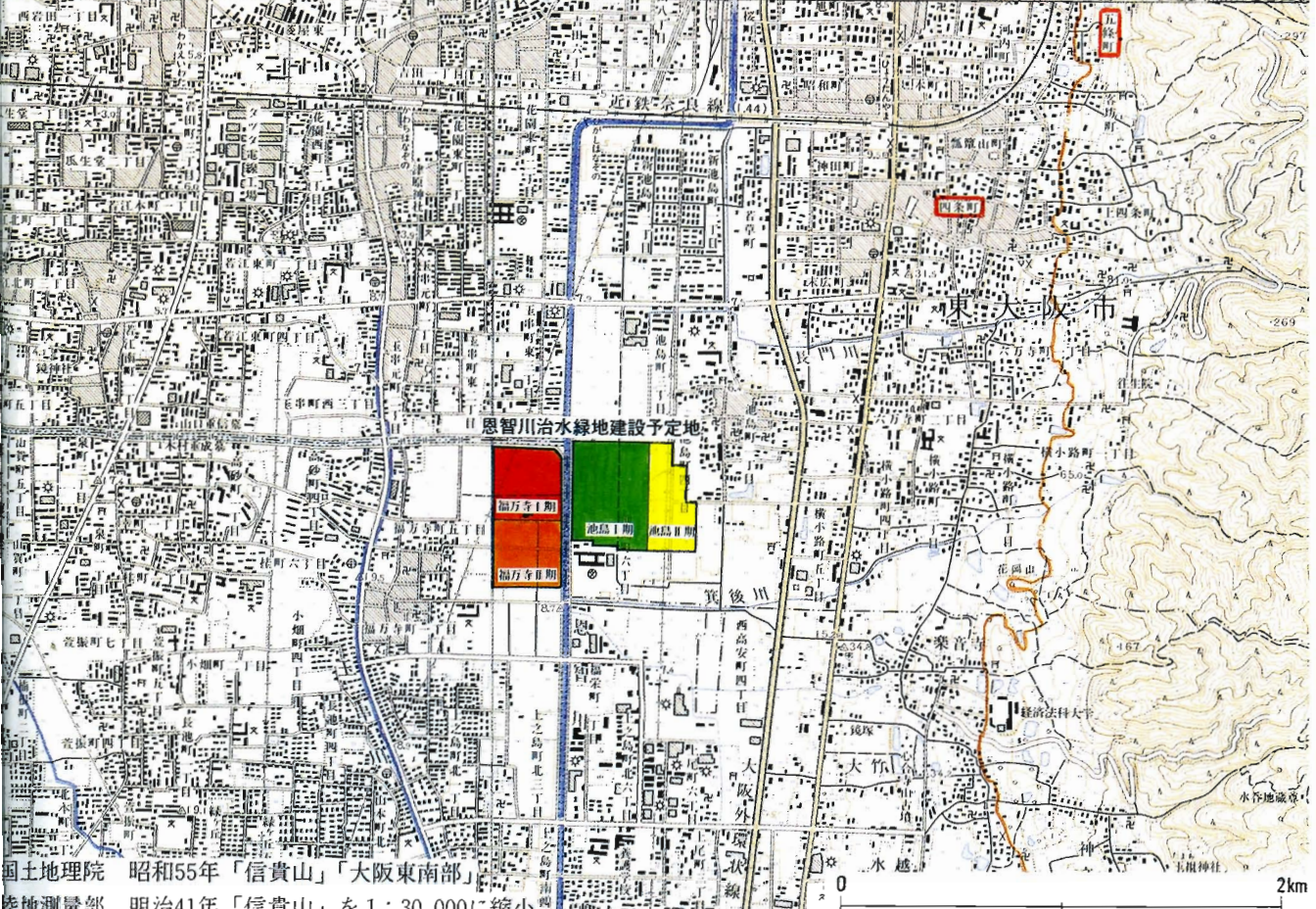
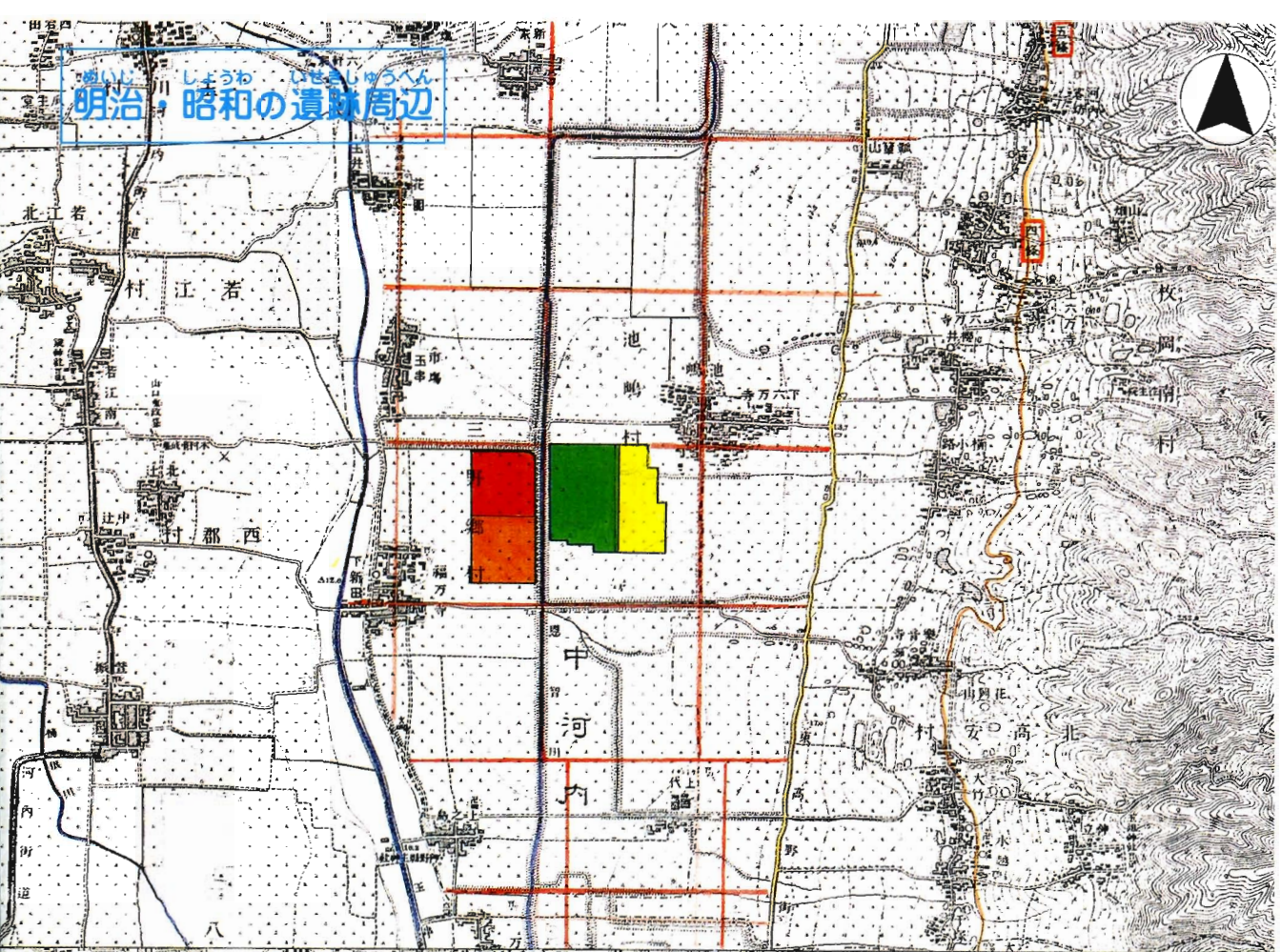
ただ、この時代には正方形にきちんと区切られた田畑がつくられるようになりました(条里制)。



鎌倉時代～現代

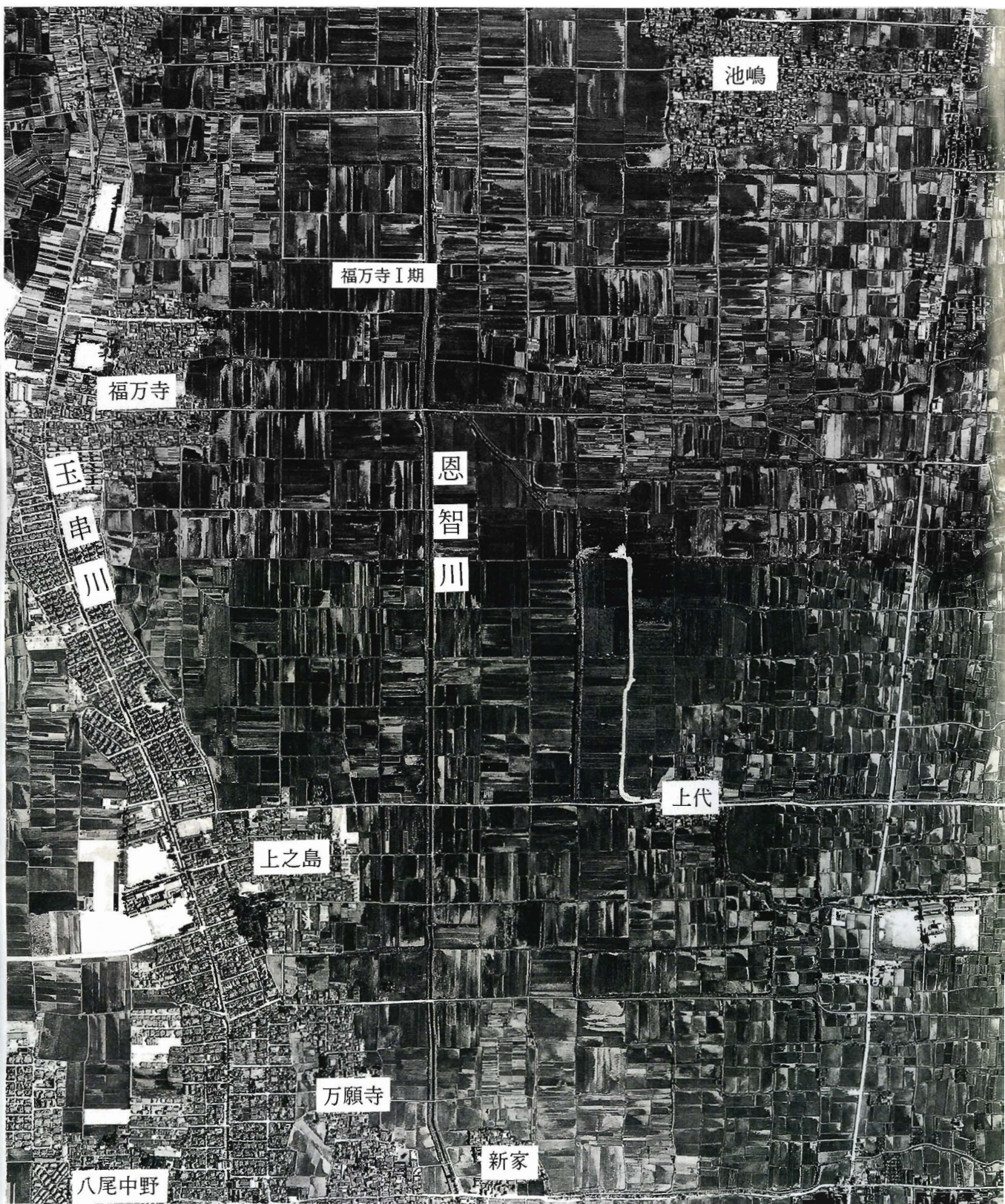
鎌倉時代から現代にいたるまで、正方形にくぎられた条里制の地割りをまもりつづけ、この遺跡の周辺は田畑として利用されていました。

とくにこのあたりでは田の一部を高くした『島畑』がつけられ、江戸時代にはそこで綿をさかんに栽培し、それをつかって有名な「河内木綿」をつくっていました。



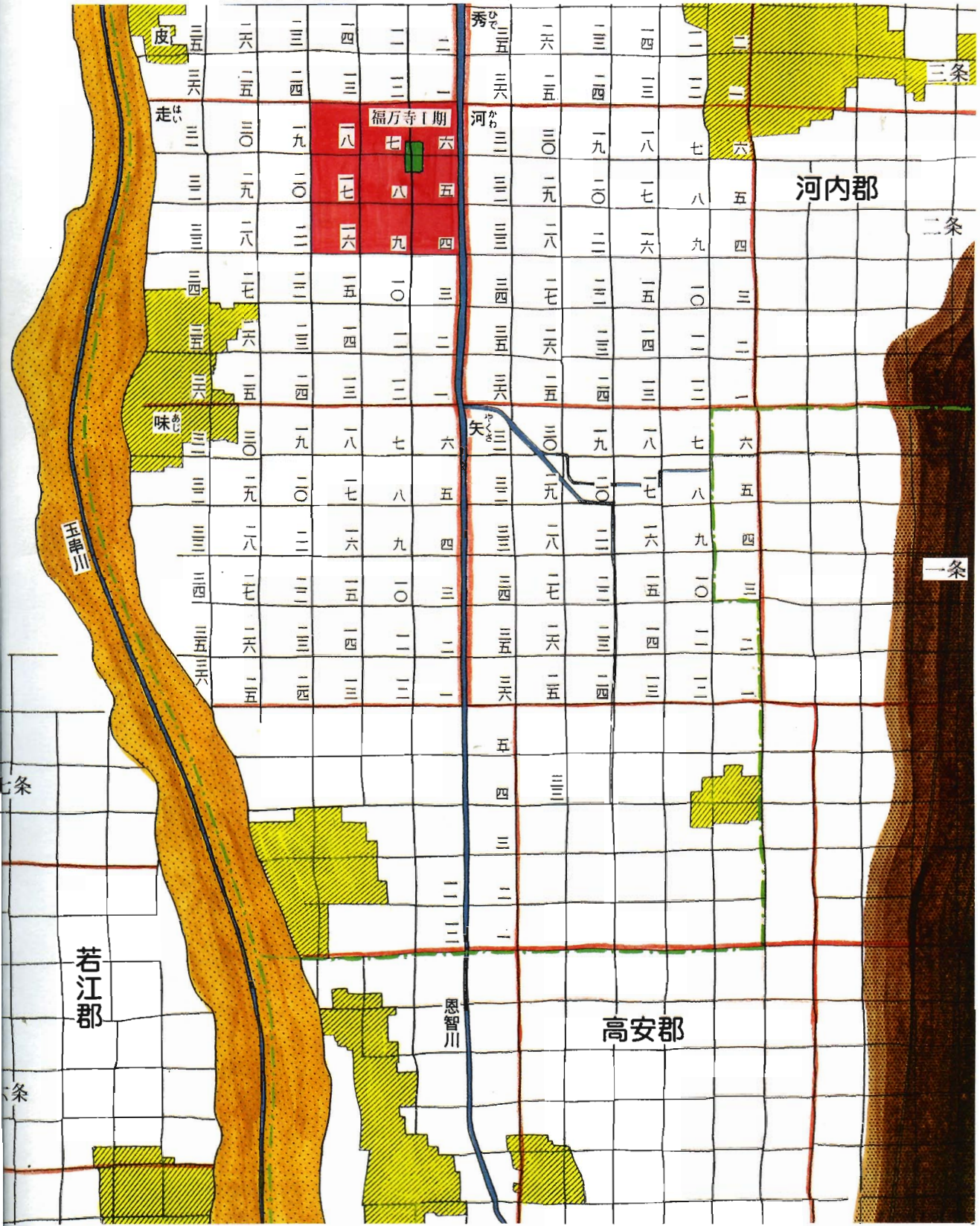
いせき そら
遺跡を空からみると

しょうわ ねん いま ねんまえ そら と しゃしん いせき
昭和36年（今から31年前）に空から撮った写真を見ると、遺跡の
あるこの地域一帯に四角い田んぼが東西南北にきちんと並んでいる
ことがわかります。現在、発掘調査を行っている場所は下の写真で
しろわくでかこんだところで、ちょうど四角い田んぼがタテヨコ三列
に並んだ部分にあることがわかります。

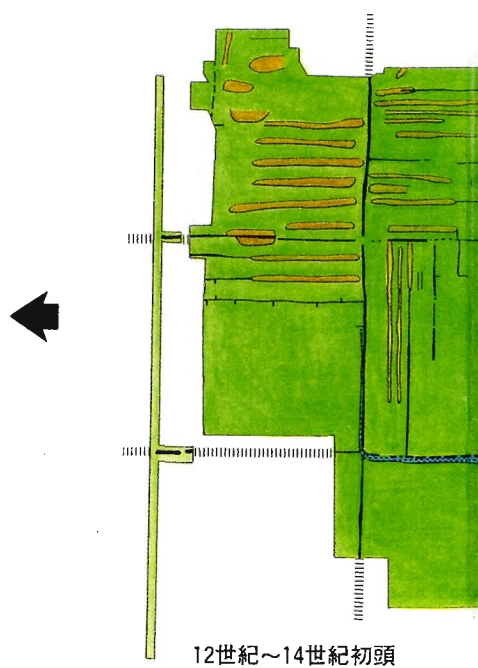
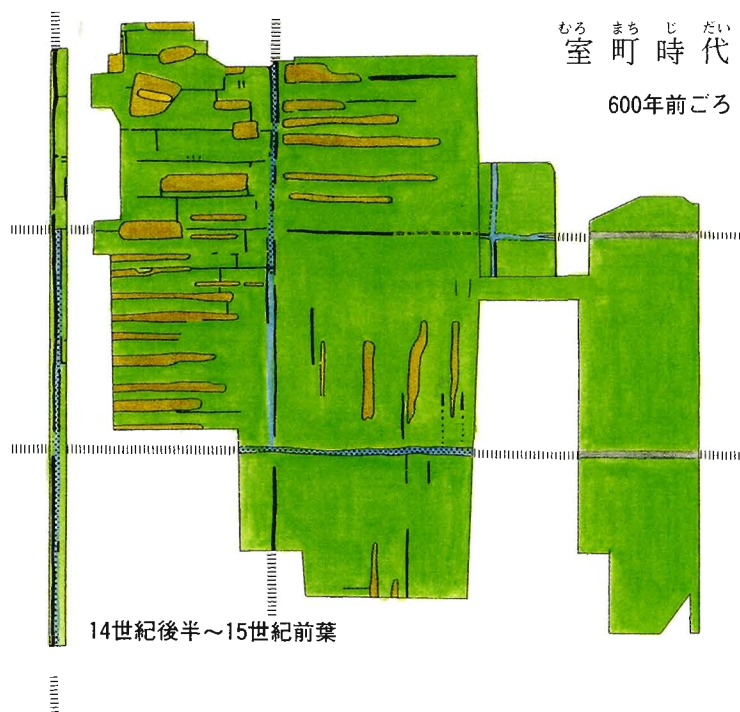
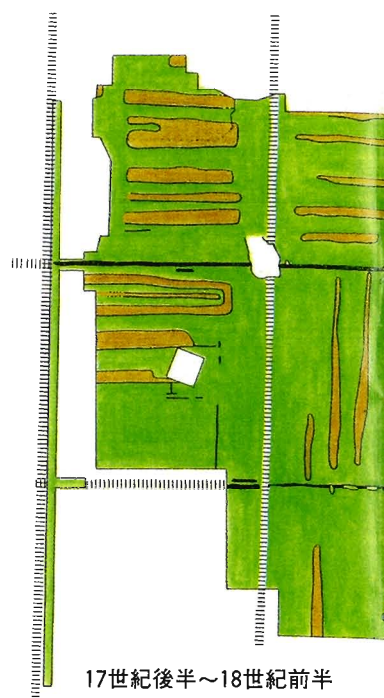
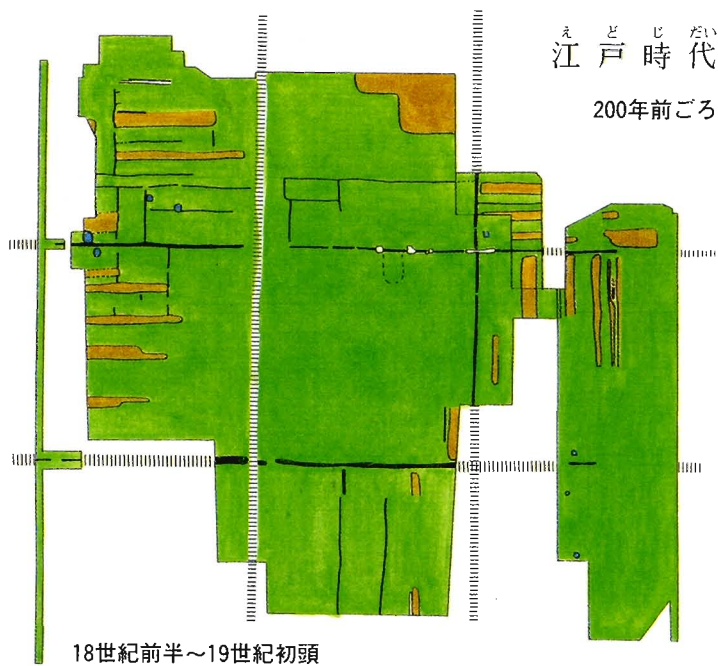


ひだり 上ページの写真とおなじ大きさでたんぼの並び方をわかりやすくしたのが下の図です。とくに、この地域周辺には四条、五条といった地名や〇〇ノ坪といった字名（地名）がよく残っており、写真や図に示した四角い田んぼが「条里制」とよばれる土地制度によってつくられたものであることがわかるのです。

いせきしゅうへん じょうり ちわり
遺跡周辺にのこる条里地割



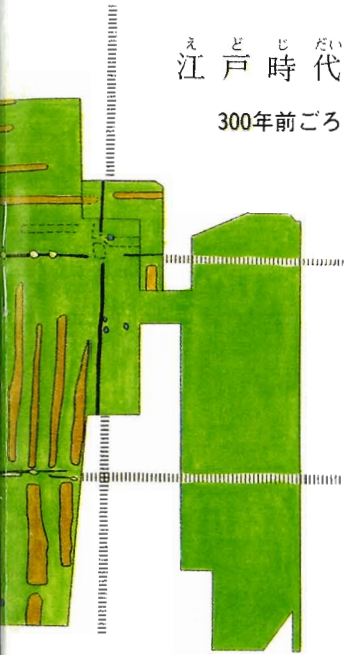
じょうりすいでん うつ か
 条里水田の移り変わり



- | | |
|----|-------------------|
| 緑色 | ・・・ 田んぼ (水田) |
| 茶色 | ・・・ 畑 (鎌倉時代以降は島畑) |
| 水色 | ・・・ 水路・井戸 |

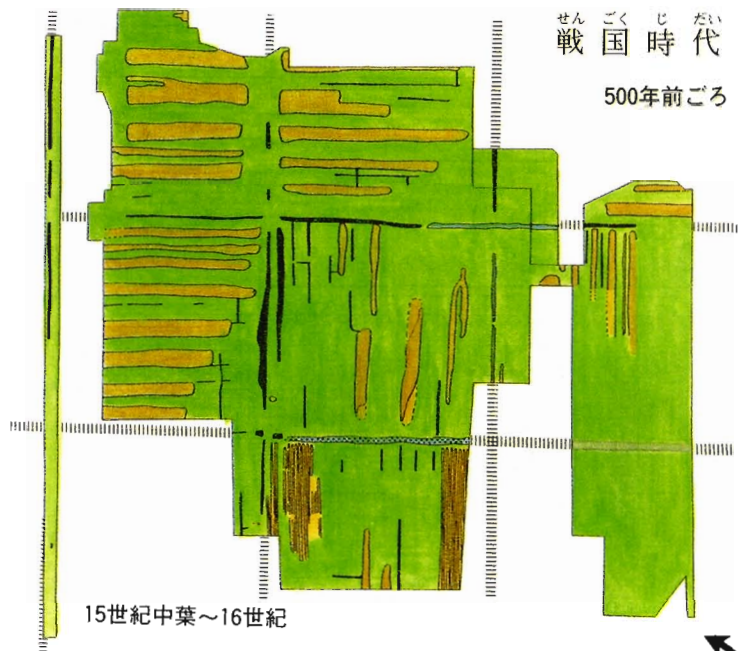
江戸時代

300年前ごろ



戦国時代

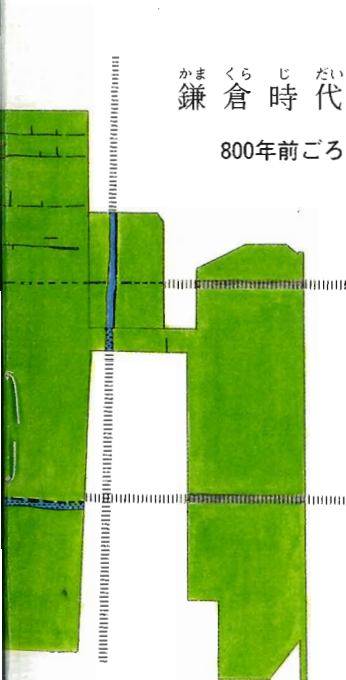
500年前ごろ



15世紀中葉～16世紀

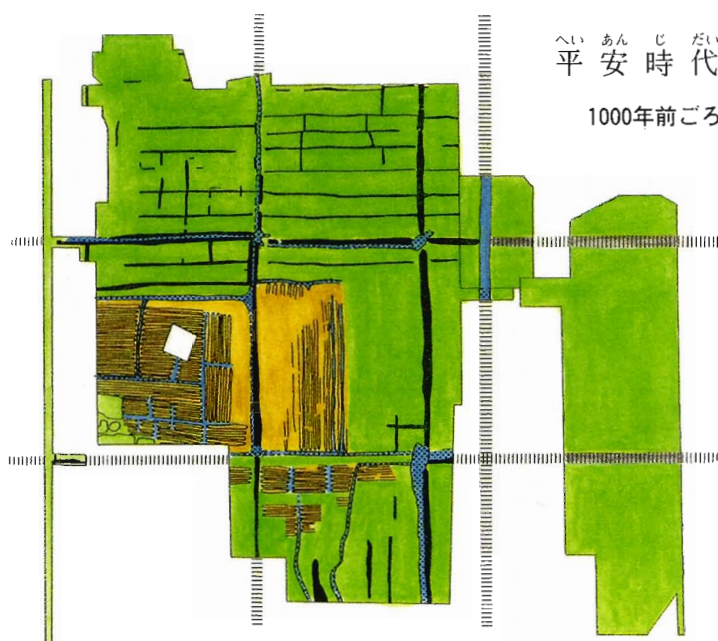
鎌倉時代

800年前ごろ



平安時代

1000年前ごろ



10世紀後半～12世紀

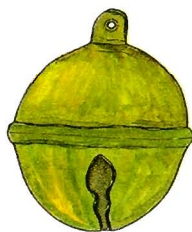
※島畑とは洪水によって運ばれた土砂などを盛り上げて田んぼの中につくった大きな細長い畑です。

ほ だ へいあん じだい すいでん 掘り出された平安時代の水田

これまでの発掘調査によって現代にまで残っている条里地割が少なくとも平安時代（約1000年前）までさかのぼるものであることがわかってきました。

また、広い面積を発掘調査したことによって、下の図のように田んぼの部分と畑にしていたと考えられる部分があることがわかりました。

ただ、この中から田畑の持ち主の家を見つけることはできず、さらに当時としては貴重な銅の鈴やお金が埋められていたことなどから、かなりの有力者の田畑（荘園）であったとも考えられます。



どう すず
銅の鈴

今の鈴とはちがって猫にぶら下げたりしたものではなく、何らかの儀式やお祭りに使われることが多かったようです。



ふじゅしんぼう
富壽神寶

日本最初の本格的なお金である和同開珎からかぞえて日本で5番目につくられたお金で818年から835年まで作られていたことがわかっています。

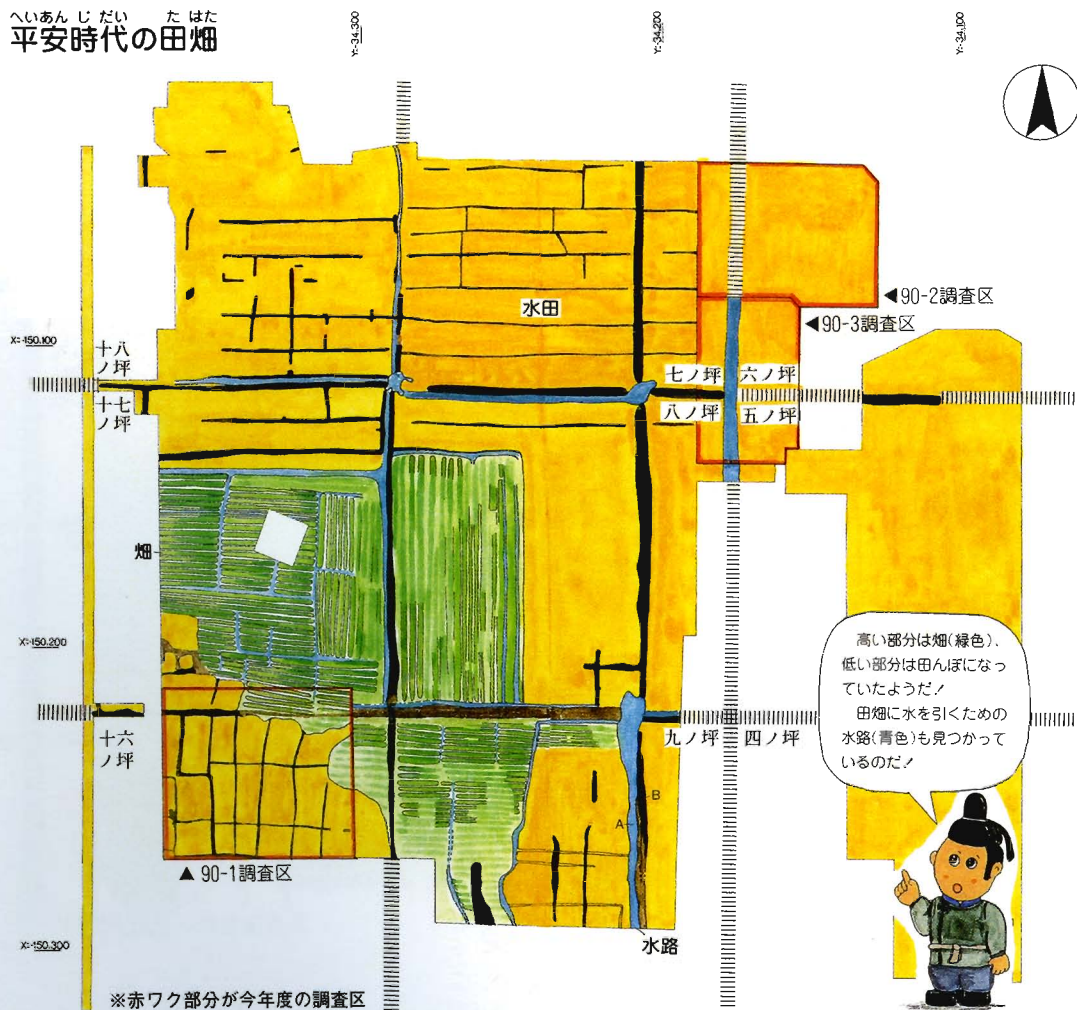


けんげんたいほう
乾元大寶

同じく和同開珎から数えて12番目に作られたお金で958年に初めて作られます。

この先、しばらくは日本でお金は作られず中国のお金を使ったりしていました。

へいあん じだい た はた 平安時代の田畑



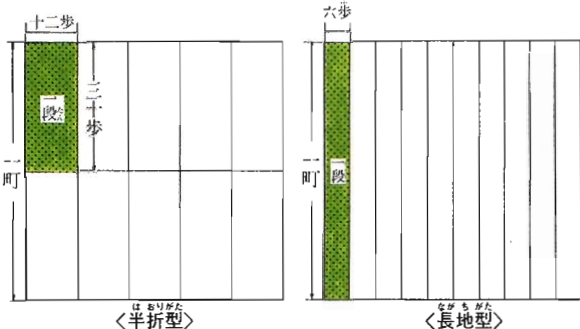
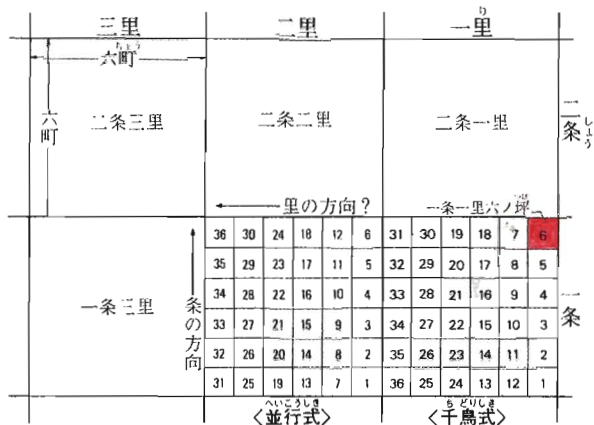
いちちょう なが たんい やく いっぺん せいほうけい た
一町（長さの単位で約109m）を一边とする正方形の田んぼの開発とそれにもなう色々な制度をふくめて「条里制」とよんでいます。

このような一辺を一町（約109m）とする田んぼは「坪」とよばれており、六町（約654m）四方の区画である「里」をタテヨコに六等分したものです。この「里」の東西南北の並びを京都や奈良に残る通りの名前のように一条、二条、... などと同じように「条」とよび、南北方向の列を一里、二里、... というふうに「里」とよんでいます。

多くの場合、「条」は北側から一条、二条とつけてゆきますが、遺跡のある河内郡では南からつけられています。さらに一つの「里」のなかにある36の坪にはそれぞれ番号がつけられます。これによって、たとえば右の図で赤く塗った場所は「河内国河内郡一条一里六ノ坪」というように表記することができるようになりました。

また、坪の番号の付け方には二つの方法がありますが、ここでは「千鳥式」であることがわかり、坪の中の田んぼの形はその多くが「長地型」とよばれる細長いものです。

じょうり ちわり よ かた 条里地割とその呼び方



やよい じだい しょうくかく すいでん 弥生時代 小区画水田

日本で米作りが始まった弥生時代から古墳時代までの田んぼの多くは左の写真のようにとでも小さく区切られています。

これは地形に合わせて作られているのとはずの田んぼに水がゆきわたるようになるための工夫だと考えられています。



へいあん じだい じょうりがたすいでん 平安時代 条里型水田

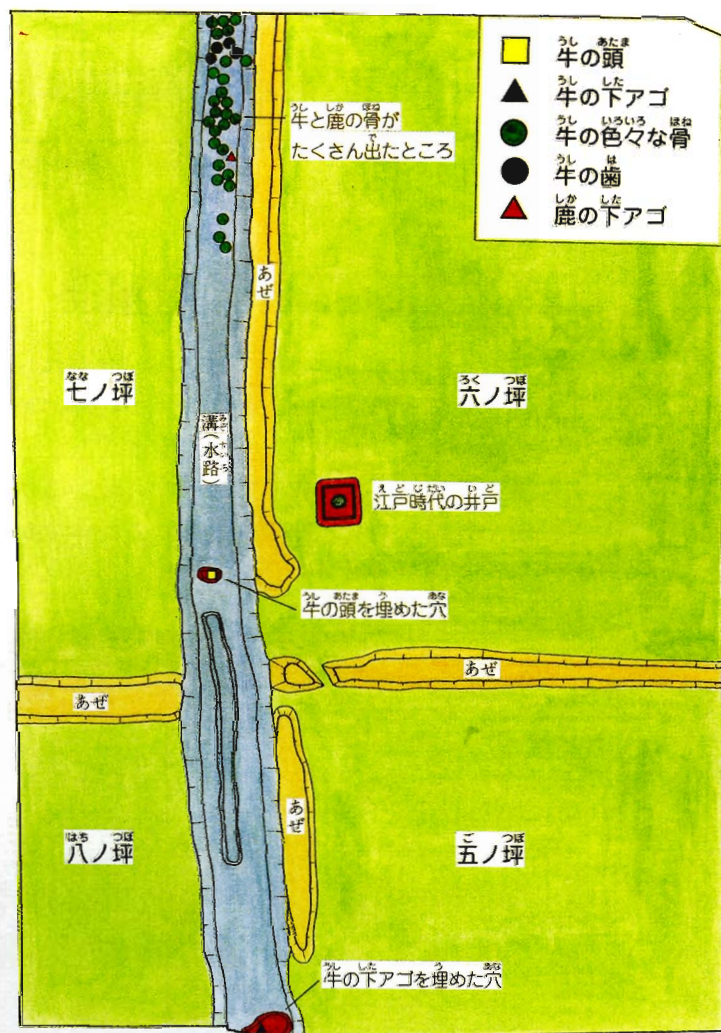
飛鳥・奈良時代ころになると国の制度が整えられ、それに合わせて田んぼのかたちも変わってきます。右の写真のように東西南北にきちんとならんだ四角く大きな田んぼが作られるようになります（条里制）。

ここでは平安時代の荘園開発に関係して大きな土地開墾があったようです。

いけにえにされた動物たち

鎌倉時代（800年前ごろ）の水田では、南北方向の溝（幅約2.5m）が見つかりました。これは、いままで見つかった水路の中でもっとも大きいもので、このあたりの主な水路のひとつであったようです。この水路からは、たくさんの茶碗や皿とともに、雨ごいなどをした時にいけにえにされたと考えられる牛や鹿の骨が見つかりました。

4つの坪が接する部分のあたりでは、穴を掘って牛の頭をさかさまにして埋めていました。また、そこから約25m南のところでは、別の牛の下アゴを穴に埋めていた。さらに、別のところでは牛の背骨・足の骨・歯、鹿の下アゴなどが約30個まとまって見つかりました。骨が見つかった所はムラから離れており、牛の肉を食べて残った骨を捨てた、と簡単に片づけられないようです。これらの動物たちは、雨ごいなどの時にいけにえにされたのではないのでしょうか。また、いっしょに出土した茶碗や皿の多くもそうしたまつりの時に使われたものであると思われます。



牛や馬を雨ごいの時にいけにえにしたという記録は、奈良時代の歴史の本である『日本書紀』にも出ています。また、平安時代に書かれた『古語拾遺』という本には、イナゴを追いつぶすために、最後の手段として水口に牛の肉を置く、というおはなしが書かれています。今回の発見はこのおはなしに書かれたようなことが実際におこなわれていたことを明らかにしました。

かわちのくにかわちぐんにじょうあざは
河内国河内郡二条字走

31	30	19	18	7	6
32	29	20	17	8	5
33	28	21	16	9	4
34	27	22	15	10	3
35	26	23	14	11	2
36	25	24	13	12	1

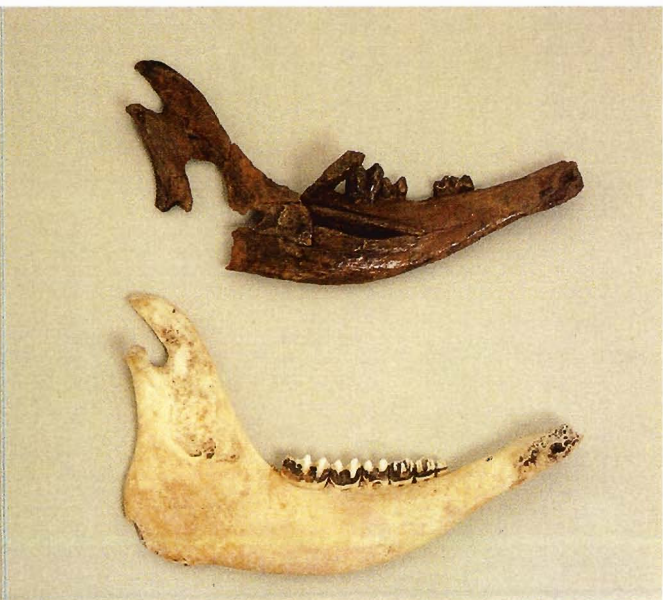
うし しか ほね
牛と鹿の骨がたくさ
ん出土した六ノ坪と
七ノ坪との境に掘ら
れた溝

うし あたま う
牛の頭を埋め
た穴

うし した アゴ
牛の下アゴを
埋めた穴

しゅつど うし いま
出土した牛と今の
牛の頭蓋骨

しゅつど うし いま
出土した牛と今
の牛の下アゴ



うし しか ほね
今の牛の骨は奈良国立文化財研究所

うし しか ほね
今の牛の骨は奈良国立文化財研究所

さて、発掘調査によって色々なことがわかってきましたが、
平安時代に何故、この遺跡周辺が大きく開発されたのかという
疑問がわいてきます。そこで参考になるのが、右にある「小右記」
という藤原実資が書いた日記です。漢字ばかりでむずかしい文章
ですが簡単に説明すると、1015年（今から977年前）に左大臣藤原道長
のものであった「玉串庄」（莊園）ととなりあう大納言藤原実資
の「辛島庄」の牧場との間で境界争いがおこり、「玉串庄」の人
が「辛島庄」の馬を追ひ散らすという事件がおこったということが
書かれています。

この日記によってこのあたり一帯に時の有力者藤原道長のもつ
莊園一玉串庄があったことがわかり、発掘調査によって掘り出さ
れた平安時代の田畑はこの玉串庄の一部であった可能性も高いの
ではないかと考えられます。

長和四年（一〇一五）四月五日条
玉串庄人追散辛島庄馬之日記、一昨持來、郡司署印、
件日記并放公驗等、今朝以政職朝臣令奉左相府、至公
驗爲定牧曰至、件牧地多爲玉串庄被打入之故也、相府
報云、召牧司源訪可定仰也、件訪不家人、從茲召遣有
恐憚歟、召遣可送者、又牧曰至玉串四至可相定者、內
內被議云、以訪成玉串庄司、莊牧等共不可令致愁歟
者、如聞宜事也、政職朝臣所傳談了、

小右記一藤原実資の日記

あしあと

発掘調査をしていると田んぼからはたくさんの足跡が見つかります。そのなかには犁や
馬鍬を引いていたと考えられる牛や馬の足跡、さらには指先や歩いた方向がわかる人の足跡、
農作物を荒らしていたのかもしれない鹿の足跡なども見つかっています。

